

子どもの本だな 46

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

うみべのハリー

ジーン・ジオン ぶん わたなべ しげお やく
マーガレット・ブロイ・グレアム え (福音館書店)
ハリーは黒いぶちのある白い犬です。ある日、ハリーはうちの人たちと海辺へ出かけました。お日様がかんかん照りだったので、ハリーはビーチパラソルの下や砂のお城の影に入ろうとしますが追いつかれてしまいました。歩き疲れたハリーの上に大波がざんぷりこ。ハリーは体中すっぼりと海藻をかぶっていました。これを見た人々は「海のおばけだ!」と大騒ぎ。ハリーは海藻のお陰で涼しくなったので、そのままうちの人たちの所へ戻ろうとしますが、どのパラソルも縞模様でそっくりです。すると、ハリーの後ろから、見回りのおじさんたちが海のおばけを捕まえようと近づいてきました…。

『どろんこハリー』の続編。オレンジと緑の色合いでハリーが生き生きと描かれています。最後、前よりも大きくて、黒ぶちのある白いパラソルにみんなと一緒にいるハリーの姿に大満足です。

読んでもらえれば4歳から。(池之上)

魔術師のおい

C. S.ルイス 作 瀬田 貞二 訳 (岩波書店)
ディゴリーとポリーは、魔術を研究しているアンドルーおじのたくらみで、未知の世界へと送り込まれました。着いた所は木々が育つのが感じられるほど静かで豊かな林の中。小さな池がたくさんあり、ひとつひとつが別の世界への入口でした。二人は、すべてが死に絶えた都チャーンを訪れます。ディゴリーは、ポリーの制止をきかずに鐘を打ち、呪文によって眠っていた魔女を起こしてしまいます。魔女は二人につきまとい、新しく生まれたばかりのナルニア国に入り込みました。ナルニアを魔女から守るため、ディゴリーたちは遠い山々を越え、若さのリンゴを取りに行く旅に出ました…。

ナルニア国が生まれる時、アスランが歌によって星や太陽、草木や動物を創りだす様子は印象的です。人間の心の弱さをみせながら、それに打ち勝って正義を守る勇気を与えてくれる物語です。ナルニア国ものがたりの6巻目。ナルニア誕生の物語。(池田)

8月	9月	8・9月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
10日	7日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
17日	14日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
24日	21日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

お知らせ

「夏休みおはなしの夕べ」

日時：8月18日(金)

① 4歳~大人 18:00~

② 小学高学年~大人 18:30~

ろうそくの灯りのもと、昔話や詩、物語を楽しみます。

※途中からは入れませんので、時間までにお越しください。

8月の絵本の時間・おはなしの時間はお休みします。

『アルカイダから古文書を守った図書館員』 ジョシュア・ハマー著

梶山あゆみ訳 紀伊國屋書店 349頁 2017年6月刊 2,100円 (請求記号) 018

十五世紀末から十六世紀にかけて、西アフリカ、マリ共和国の都市トンブクトゥは、交易と文化の中心地として栄えた。市場には世界各地の商品やヨーロッパ産の生地が並ぶ。大学があり、法学、科学、哲学、文学など様々な分野で、飾り文字を駆使した美しい写本が造られ、取引されていた。寛容で開かれたイスラム社会が根付いていたのだ。しかし、北部の遊牧民トゥアレグ族の反乱や他国の支配など歴史の転変のなかで、愛書家たちは貴重な写本の略奪や散逸を恐れ、自宅の書庫の扉に泥を塗って隠し、庭に掘った穴に埋め、砂漠の洞窟にしまいこんだ。やがて古文書の価値は忘れられていった。

一九八四年、アブデル・カデル・ハイダラ青年は、アフマド・ババ研究所の調査官として、ニジェール川を船で下り、ラクダやロバに揺られながら地方の旧家を訪ね、家畜や書籍と交換に先祖伝来の貴重な古文書を譲り受けた。書物の価値を見極めるハイダラの鑑識眼は磨かれ、この地の歴史、宗教に造詣の深い識者と目されるようになった。九年後には、法学者であった父から託された古文書を守るため私設図書館の開設にこぎつけ、各国の援助のもとに古文書を保存する団体「Savama DCI」も設立された。トンブクトゥは、アラビア語古文書保存の世界的中心地のひとつとなっていた。

しかしその頃、「イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ(AQIM)」がトゥアレグ反乱軍と手を結び、トンブクトゥを制圧、過激なイスラム警察が住民を弾圧し始めた。ハイダラは、寛容なイスラム社会の礎となった古文書が危機にさらされていると、国際社会の支援をとりつけ、古文書を避難させることにした。閉館後の図書館で、協力者とともに何箱もの大箱に古文書をつめ、検問をかくぐり荷車や船で安全な場所に移動させたのだ。

武装勢力の支配の詳細や、フランスの軍事介入が克明に記されて、読む者の胸を重くする。しかし、危険をかえりみず歴史と文化の保護に尽力したハイダラに敬意を抱かずにはおれない。
(片木)

8月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		X	2	3	4	5
6	7	X	9	10	11	X
13	14	X	16	17	18	19
20	21	X	23	24	25	26
27	28	X	30	31		

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	X	6	7	8	9
10	11	X	13	14	15	16
17	18	X	X	21	22	23
24	X	X	27	28	29	30

- *カレンダーのX印は休館日。
- *■は館内整理日。返却のみ受けつけます(10:00~17:00)
- *開館時間は10時~18時。金曜日は20時まで開館。

やさしい考古学講座

「縄文の人々の暮らし」
「東南遺跡」はじめ県内の代表的な発掘成果から、縄文時代の人々の暮らしを学びます。
講師：深井明比古さん
(兵庫県立考古博物館)
日時：8月26日(土)
14時~16時
会場：あすかホール
ミニシアター
対象：小学生以上大人まで
3年生以下は保護者同伴
定員：60名(要申込)

地下水

椎名誠の『ノミのジャンプと銀河系』に取り上げてあった『ガリヴァー旅行記』を読みたくなくなった。20年ほど前に、読み切れず放ったのだが、今回は面白い。これでしばらく、就寝前の楽しみができたと思いでいた。

7月半ばの日曜日、落雷で高圧ケーブルが損傷し図書館は停電。電気が復旧しないまま翌日の開館となった。冷房も照明もなくパソコンも使えない。本の貸出、返却はハンディターミナルで行った。曇っていたので、前日にくらべ暑さもまし、月曜日だから来館者も少ないと思っていた。でも、暑いし、来館者も多かった。

薄暗いカウンターで、新刊本をどこかの棚に並べるか決める分類作業をしていた。その中の1冊が、震災をきっかけに電気製品の使用をやめてしまった元新聞記者、稲垣えみ子さんの『寂しい生活』。電気にたよってきた図書館業務と、電気なしでは快適に過ごせない自分の体に「これでいいのかな」、「どうしようもないか」と複雑な気持ちだった。

電気は復旧したものの、空調機器に支障があり、数日間、館内の温度が下がらなかった。毎晩、本には触れるものの、ガリヴァーを未だリリパット国に留めたまま、眠ってしまう。

(竹内)

